

連 載

予防医学という青い鳥(7)
ナイチンゲール、ノブレス・オブリッジの生涯
挫折と病床でのたゆみない戦い

青木 国雄

戦前の小学生の多くはナイチンゲールの名を知っていた。気品のある優雅な婦人が、小さなランプを手にして、野戦病院で死に直面した傷病兵の手当をしている場面である。看護婦がまともな職業ではなかったのに、貴婦人が前線に立ち、大活躍したことに人々は感動し、しかも世界をリードしていた英国のエピソードだけに、ナイチンゲールは世界中の雲の上の人になっていた。

戦後間もなく医学生となった筆者らは、看護学に就いてはわずかな講義だけで、ナイチンゲールの話は何も紹介されてない。臨床医となり、患者の苦痛や異常感、病状経過、罹病や治療歴、家族の病歴は詳しく聞き取ったが、看護の状態についてはほとんど問診していない。治療と看護の境界は明確でないのに気付かなかったのである。看護関係者とはいろいろ話をしたが、ナイチンゲールを話題にしたことはなかった。ナイチンゲールの伝記類については戦前の邦訳もあったはずであるが、戦後、書店の棚には長く見当たらなかった。

敗戦後は占領軍の指令もあり、保健、看護が重視され、看護婦の地位は向上したが、医学会の一分野としてはなかなか認められなかった。しかし日本でも看護学は年々専門化し、独立した医学看護体系が出来上がり、有能なスタッフが活躍するようになってきた。看護学関連出版物も多くなり、ナイチンゲールの業績を邦訳して紹介しようとする動きが、1970年代に始まった。老人保健法が改正され、特定疾患(難病)対策が始まり、心身障害対策も強化され、現役の看護婦数が30万人をこした時期である。もっとも有名な「看護覚え書」はすでに1967年に邦訳出版され、版を重ねていたが、これを購入した医師はどれくらいあったろうか。ナイチンゲール全著作集を刊行は、大英博物館の協力で150篇の著作が選ばれ、それを1974年から1977年の間に刊行したとある。全集3巻で、代表的論文が含まれ、カイゼルスウェルト学園、陸軍病院の看護、看護覚え書をはじめ、貧しい人々の看護、看護婦の訓練、病院覚え書、衛生と健康教育、インドの英国陸軍の衛生、病院看護、インド民衆の衛生と看護などの

ほか、神学・哲学的論文もある。レベルの高い専門書であり、日本の幕末から明治中期にかけて書かれたものとはおもわれぬ、並々ならぬ作品である。

筆者とナイチンゲールとの出会い

1983年、筆者は重松逸造教授（当時は公衆衛生院疫学部長）のご推薦もあり、アジア・太平洋地域の代表として国際疫学学会の理事に選出された。名誉なことであったが、非常に多忙な時期であり、慣れない国際的な仕事はかなりの負担であった。しかし、この理事会や学会を機に、ロンドンのセント・トーマス病院をときどき訪問することになった。後に国際疫学学会会長となるウオーター・ホランド教授はセント・トーマス大学、公衆衛生学部主任教授であり、新しく加わった筆者にご指導やご示唆を戴いたので、ときどき大学にお邪魔したわけで、そこでナイチンゲールに再会したわけである。ホランド教授は最初の訪問時、ナイチンゲールが設計した病棟に案内され、世界中から見学客が絶えまなく訪れ、病院の誇りといわれた。ナイチンゲールが建築設計までしていたことを知らなかった筆者は、恥ずかしい思いをしながら覗いてみると、高い天井と広々とした飾り気のない大病室があった。帰国して昔の写真を見ると、患者病床は窓際に並べられ、医師の診療を受けていたが、患者間にスクリーンはなかった。清潔に保たれ、看護婦も働きやすいようであった。特徴として、換気が良いこと、診療の能率もよく、患者は看護婦や医師の位置を確かめやすいので、精神的安堵が得られるなどが記されてあった。セント・トーマス病院の入り口にナイチンゲール記念館（博物館）があり、狭いながら、彼女の貢献を示す数々の史的ポスター、模造モデルや図書、パンフレット、みやげ物が展示してあった。そこで入手した小冊子でナイチンゲールの簡単なプロフィールを知ることができた。これを機に筆者は邦訳のナイチンゲール全集とか、彼女の伝記をつづったセシル・ウーダム・スミスの「ナイチンゲールの生涯」（1950年に発刊）を入手して、彼女の生い立ちや、野戦病院勤務、後半生のすさまじい努力を知ったが、走り読みであり、記憶に残るところは少なかった。

数年前、病院建築の権威者である名古屋大学柳澤忠先生ご夫妻と鼎談した折、ナイチンゲールの「看護覚え書」は病院建築を考える上で、基本的に重要であるといわれ、家に帰って読み返してみると、極めて優れた記述で、現在でもそのまま教科書になり、また病院設計上有用なことも理解できた。ところが、まもなく、柳澤先生から、ナイチンゲールは病院建設自体に反対の意見を持っていたとの書があり、その評論が出ている、それはヒュー・スモール著の「ナイチンゲール、神話と真実」という伝記で

あるとの連絡を下さった。2003年にすでに邦訳が出版されていた。早速購入して読んでみた。

彼女の出生から家庭の状況、教育、混乱の時代の不幸な人々との出会い、神の啓示、看護への決意、クリミヤ野戦病院での献身などは、スミスの著書と大きな相違はなかったが、異なるのは、クリミヤ戦争から帰って12ヵ月後に彼女が倒れた原因は、これまで言われてきたような過労とか、家族間の葛藤などという問題ではなく、罪を意識した精神的打撃によるものとした点である。著者のスモール女史は、ナイチンゲールの膨大な資料を注意深く読み直し、また最近、いくつかの未公開の公私の書簡を閲覧し、総合的に考察、推論して、記述したものである。

ナイチンゲールはクリミヤ戦役中、文字通り驚くような活躍をし、大賞賛をうけたが、心労を傾けた活動が、負傷兵の死亡率低下には役立っていないことを知り、大きなショックを受けて倒れ、死に瀕するほどの状態になったという。これは驚きであった。彼女は、看護、衛生・予防医学という青い鳥を追い、それを手にした数少ない稀人と筆者は思いこんでいたからである。

ナイチンゲールの履歴をここで紹介するまでもないが、幼少時から才媛の誉れが高く、基礎科学を含む諸種の専門学を一流の教師や学校で学び、多くの外国語を習得し、少女時代神の啓示を受けて、人を助ける事業を志し、始めは看護、ついで看護や病院の管理を習得し、その上、有名なケトレから統計学まで学んでいる。これだけ教育された子どもはないと父親が自慢したほどである。外国もたびたび訪問し、学習し、見聞を広め、いくつかの病院や看護施設の組織や運営まで体験し、研究していた。子ども時代から交際があった多くの男友達は、大臣、政治家、実業家など有力者となり、援助も多かったが、彼らも彼女から意見や助力を求めることが多かった。観察が鋭く、調査は科学的であり、実務にもたけ、文筆もたつ第一流の人物に成長していた。

ここでは、まず、問題のクリミヤ戦争に就いて簡単に紹介したい。

クリミヤ戦役とナイチンゲールの活躍

19世紀に入り、ロシアは国内事情もあり、他の列強に習い拡張政策を続け、特に南方の国々を侵略していた。ペルシャ戦争やギリシャ独立をめぐるトルコとの戦争で勝利を収め、黒海東海岸を領有し、クリミヤ半島の先端、セバストポリに要塞を作り、黒海、ポルフォラス海峡の通行権を独占していた。ロシアの南下政策を恐れた英国などは、1840年ロンドンで条約を結び、ポルポラス海峡はどの国の軍艦も通行できないと規定し、ロシア艦隊を黒海に封じ込めてしまった。1853年1月、ロシアのニコライ

1世はトルコに軍事同盟を持ちかけたが、条件が厳しいのでトルコが拒否すると、軍隊を派遣した。危機を感じたイギリス、フランスはトルコと同盟を結び、10月にロシアに撤兵を要求したが応じなかった。トルコは11月、ロシアに宣戦したが、シノベ港でトルコ艦隊は撃破されてしまった。それで1854年6月、英、仏は黒海に艦隊を送り、5万5千人の兵士をダーダネルスに上陸させ、ガリポリ、スクタリに駐屯させた。英国は戦争を避けたかったようであるが、政府は世論に押される格好で、ラグラン最高司令官にセパストポリの包囲を命令した。イギリス軍2万2千、騎兵1千、フランス軍、歩兵2万、砲70門、トルコ歩兵5千がクリミヤ半島の西北海岸に9月14日、上陸した。ロシア軍は要塞の前面の湾に軍艦7隻を沈め、艦砲射撃から守っていたので、陸からの攻撃には弱いと考えたわけである。不幸なことに英仏の駐屯地ではこの時期、コレラが流行しており、上陸早々多くの英国兵士が罹患し、脱落した。英国軍のクリミヤへの上陸作戦は、打ち合わせが不十分だったらしく兵站部の準備が遅れ、輸送船の数が足りず、結局、牛馬、荷車、天幕、炊事道具、救護用品、医薬品、寝具や貯蔵食品など輜重品の多くを積み残してしまった。上陸後、医療品が不足していることに気づいた軍医は何たることかと叫んだとある。約1000名の兵士がコレラでスクタリの野戦病院に送られた。1週間後、アルマ河で激しい戦闘が行われた。ロシア軍ははじめの予想と違い強く、やっとのことで撃退、勝利を収めたが、多くの負傷兵を出した。負傷兵の病舎は狭く、多くは地面に横たえられ応急処置を受けた。外科手術は麻酔薬もなく行われたとある。そして負傷兵は、小船でスクタリへ移送された。

スクタリとは、黒海の出口である南端のボスポラス海峡に位置するイスタンブール（コンスタンチノーブル）の市街の東、海峡を挟ムアナトリア側のユスキダール（英語名でスクタリ）地域である。このスクタリの崖の上の建物が野戦病院で、トルコ軍の兵舎を改装したものであった。ボスポラス海峡は長さ32キロ、幅1.6から4.8キロあり、コンスタンチノーブルでマルマラ海につながり、そこから地中海に出ることが出来る要衝の地である。つまりクリミヤ半島の負傷兵は船で黒海を横断してこの野戦病院に運ばれたわけである。野戦病院では、既に1000名のコレラ患者と非常に多くの負傷者で一杯になっていた。クリミヤへは英国からすでに膨大な医療品や必要物質が送られていたが、当時のこの地方の港湾は整備されておらず、連絡も行き届かず、多くの荷物はスクタリ病院に届いていなかった。こうした状況の11月3日、ナイチンゲール看護団がスクタリに到着したのであった。

この戦役にはタイムズ誌が始めて従軍記者を送り逐次戦況を報じていた。記者は、

クリミヤでの英国兵士の勇敢な戦闘ぶりを報道し、戦闘で勝利を収めたが、おびただしい負傷兵は医療や看護が充分でなく、戦場に放置され、劣悪な収容施設で死亡している。フランス軍では修道院看護婦により、看護が手際よくなされていて、英国は一段と見劣がすると報じた。これを見て英国の世論は沸き立ち、政府はその対応を迫られていた。時の戦時大臣、シドニー・ハーバートはナイチンゲールの友人であり、彼女の病院管理や看護能力をよく知っており、また彼女もこうしたときに活動したいという希望を持っていた。しかし、厳しい前線に彼女を送り出そうとは考えもしなかった。再度、彼女から強い要請があり、この地域の不衛生なこと、激しい戦闘と重症の患者、軍病院であるので、軍医の管理下での看護活動は容易ではないなどを知らせたが、本人の決意は固かった。それではと言うので、この貴婦人をクリミヤの野戦病院の救援看護を依頼することになった。政府としては誠にありがたいことであり、ナイチンゲールに大きな権限を与え、自主的に活動しうるよう前線に命令を送った。ナイチンゲールの家族や関係者はかねてから看護婦という職業を卑しいものと考えており、ましてクリミヤの前線などには大反対であった。現地の看護婦は吞んでくれで品行が悪いものが多いという噂にも困惑しきっていた。彼女は自分で費用を準備したばかりでなく、支援者からかなりの寄付金を預かり持参することにした。何が起こるかわからなかったからである。まず、看護能力、経験があり、国家に奉仕しようとする看護婦 38 人を募集したが、応募者は多くなかった。慎重に選考し、軍病院では規則を厳しく守ってほしいと要望して看護団を組織したが、すべての看護婦が心になう者ばかりでなかった。彼女は現地で必要と思われる資材を購入し、スクタリへ出発した。途中でも必要品を追加購入している。

ナイチンゲールがスクタリへ到着した 1854 年 11 月 3 日は土砂降りであった。そして病院には 5 日に入った。病院は施設、設備ともに老朽で、すでに多数の重症な患者が苦しんでいた。軍病院側は看護婦援助などあてにしておらず、この多忙のさなか、貴婦人を長とする看護団の来訪は本当に厄介だと考えていた。看護婦にあまり期待をしていなかったからである。病院はこの看護団に病棟の隅の狭い 5 部屋と台所を看護団に宛てがい、何も命令しなかった。これは何もするなという意味であった。これらの部屋は家具もベッドも少なく、掃除もされてなく、ある部屋では死骸が残されていた。最初の夜、看護婦たちは明かりのない部屋の固い寝椅子で横たわったが、ネズミは騒ぎ、ノミははねまわっていた。飲料水も充分ではなかった。翌日ナイチンゲールは自費を使い、自分たちの家具や調度品を町の市場で購入させ、狭く汚い調理場を整備し、炊事用具を備えて自炊を始めた。近くで患者たちが食事もなくうめいていたが、

命令がなければ何もしないよう看護婦に命令していた。規律違反は避けねばならなかった。翌日クリミヤのパラグアバで戦闘があり、その負傷兵500名余が運び込まれた。彼らは搬送中に死亡したものも多かった。入院兵士たちの食事は雑役夫が専用のせまい炊事場で調理されていたが、食品数は少なく、水も調味料も乏しく、大雑把な調理で、その粗末な食事もいい加減な分配で、行き渡らない者もあり、患者は飢えと乾きに苦しむものが多かった。現状を見かねて、彼女たちは11月6日から携帯用のコンロで、持参した材料による特別食を作り患者に食べさせようとした。それも公式の認可が必要と騒がれる始末であった。しかし1週間後には、病院側は負傷兵の特別食は看護団に頼り切ることになってしまった。この食事は病院の予算を使っていないのに、調達官は職権を犯されたと上官に抗議する始末であった。数日後、要塞の北部にあるインケルマンにロシア軍が奇襲を仕掛けてきた。大戦闘の後に撃退したが、また大勢の兵士が死傷し、スクタリへ運び込まれることになった。あまりにも病人が増加するので、病院側も医師たちも手の打ちようがなく、仕方がなくナイチンゲールたちに助力を求めてきた。ようやく病院から命令が出たのであった。しかし制限付きであった。病棟を見回ると、急性下痢症が1000名もいるのに、病院内便器は20個、便所は詰まっており、便の混じった汚水は床に溜まっていた。便をいれるタライは各所に放置されていた。洗面器もタオル、石鹸もなかった。浴槽も少なく患者は体も洗えなかった。下痢患者は増加し、負傷兵は赤痢のほか、壊血病、凍傷、それに栄養失調で次々と死亡した。屍体は一晩中病室に放置されることも多かった。病院にはベッドはなく、回廊のタイルの床にじかに敷かれた藁のベッドに、頭を壁に向けて患者は横たわっていた。患者間隔は横50センチ、また反対側1メートルをへだてて、逆向に患者が収容されていた。病室の換気はわるく、むせ返るような臭いよどんだ空気が漂い、病棟は清掃もされず害虫が這い回っていた。当時の兵士は洗面用具や医薬品は自分で持参するのが通則であったが、戦闘が激しく、すべてを捨てて撤退せよとの命令で何も持っていなかった。一方病院幹部は、そうした必需品を殆ど補給しなかった。そんな責任はなく、予算もなく、給与は考えてもいなかった。看護は酒浸りの看護婦や病気の兵士が多く、緊急の手術や手当以外あまり仕事をせず、詰め込まれた負傷兵は放置に等しかった。英国の兵士は、金だけが目的で従軍する能なしの飲んだくれが多かった歴史があり、消耗品と考える上官が多く、負傷兵を懸命に救命するという意欲も不十分と言われていた。クリミヤ前線では臨時兵舎は粗末で、屋外で寝起きすることが多く、仮の野戦病院は狭く、負傷者は大部分外で寝させられていた。食事も粗末で少なく、清浄な水もなかったという。前線構築のための準備が全く不足していたわけであ

る。

ナイチンゲールは現地についてから、命令がないので余暇を利用して看護婦に藁床を多数作らせていたが、それが早速間に合い、患者収容の大混乱を避けることが出来た。病室をまわり、5週間も放置された患者の衣類を洗濯し、新聞記者が寄付したボイラーを使って湯を沸かし、汚れた患者の体を洗い、シラミをとり、持参した清潔な服に着替えさせた。不潔な病室の掃除も繰り返したが、彼女らの力では充分清浄できないほど汚れていた。医療面では予想外に医師たちは少人数ながら手際よく手当てをし、休む間も無く緊急手術をしていたが、予後は良くなく、多くが死亡した。病院の食事、消耗品などの在庫も多くなく、予算も少なかった。その上、この11月に到着するはずの輸送船が、黒海でひどい嵐に出会い、多くが沈没し、物資補給のめどが立たなくなっていた。兵站部も調達部も狼狽し、組織崩壊の様相を呈していた。それを見て、ナイチンゲールは町で患者の必需品、食品、炊事用品、下着などの衣類、掃除道具までも自費で購入し、これも係官の許可を得て供与し、一時的に事態を収めた。緊急に備え3万ポンドを持参していたからである。

12月に入り戦闘はますます激しくなり、17日間に4000名の負傷者が送り込まれ、収容場所もなかった。病院は予算もなく、収容計画も立てられなかった。ナイチンゲールは未使用の病棟を補修すれば何とか収容できるとの案を出したが、病院側は予算が乏しく、実施は難航した。そこで、ナイチンゲールは自費で必要資材と建設要員を確保し、短期間に負傷者を収容する場所を作り解決を図った。病院側も今更のように彼女の実力に驚いた。そのほか、病院には外国人の雇用者が多く、その待遇をめぐる問題が多く、放置すれば病院管理に支障が出るので、ナイチンゲールが家族をふくめて面倒を見ることになった。

さて、ナイチンゲール看護団が看護に入ると、負傷兵は大歓迎をしたが、病院側は快く思っていたわけではない。他からの批判を恐れたわけである。看護団の仕事には相変わらず厳しい制限をつけたので、ナイチンゲールは看護婦の活動が規則違反にならないよう常時監視する必要があった。それでも小さな問題は起こった。病院側は必要な物品でも規則をたてに出し渋り看護に差し支えるので、ナイチンゲールは、官僚的な事務官をいろいろ説得する仕事もせねばならなかった。

12月、負傷兵の死亡率は引き続き高かったが、軽症者も短期間に重症化し死亡し始めた。ナイチンゲールは重症者の看護にも立ち会ったが、死亡すると患者家族に手紙をしたため、丁寧な病状報告とお悔やみを送っている。何百と言う数である。死者を前に泰然として仕事をつづける彼女は驚くべき存在だった。彼女はつねに率先して休

むことなく働き、医師との摩擦を避け、看護婦に適切な指示を与え、また疲れた看護婦をいたわった。しかし負傷兵の死亡率は下がらなかった。こうした困難な状況下では、意見の相違から、ナイチンゲールに抗議し、スクタリから去る看護婦も出てきた。その頃、政府は看護婦不足と判断し、新たに看護団を派遣してきたが、ナイチンゲールが予想したごとく、能力がないものも多く、負傷兵の看護を避けるものや、出身宗派の意見の相異などもあり、かえって看護能率は低下し、それを調整するのも大変だった。

彼女は戦時大臣ハーバートに現状報告すると共に、戦場への必需品の内容、送付方式、調度品や給付組織の規則の改正、医療予算の増額、硬直した病院や関係役人の官僚的な仕事振りが医療看護を阻んでいること、基本的に陸軍の衛生が現状に合わず、衛生教育の不徹底がそれを助長していること、さらに、士気を高めるため、負傷兵の給与の増額まで要求している。憂国の情が綿々としており、余人で出来ることではない。

ナイチンゲールの活躍はマスメディアや患者の手紙などにより本国に伝えられ、ナイチンゲール看護団の評価は国内で日に日に高まった。女王からも感謝と励ましのお言葉を賜った。関連して、国内では有能な看護婦の養成が必要との声が大きくなり、臨時大臣ハーバートが作ったナイチンゲール基金に何百万ポンドの基金が送られてきていた。

「あの人が通り過ぎる姿を見るだけで、どんなに慰めになったか」、「あの人は患者に言葉をかけ、多くのものに微笑みを投げかけた。全員には不可能だったが、通り過ぎ行く彼女の影に接吻し、それから満足して枕に頭をうずめるのだった」とは兵士たちの回想である。一方ナイチンゲールは「あのような病のさなかにあって、兵士たちは下品な言葉を避けて、私共に心遣いをしてくれた。それを思うと涙を禁じえない」といっている。

かくて、「ランプを手にした婦人が おぼろな闇の中を 部屋から部屋へ通りすぎる 患者たちは 至福の夢を見るように 体の向きを変え、彼女の影が落ちるとき その影に口づけする」、「東方のナイチンゲール」、「嵐を乗り切る麗わしのフローレンス」、「東方の星」、「枕辺に落ちる影」「優しく微笑む天使」などの唄が愛唱され、ナイチンゲール神話が始まっていた。

秘密の前線視察団と衛生調査団の派遣

時の陸軍大臣 パンミュア卿は前線にいた弟から軍隊の衛生が劣悪と聞かされ、ま

たナイチンゲール看護団をサポートする意味もあり、首相のパーマストン卿と相談し、秘密裏に物資調達の調査をする専門家を含む5人の視察団を派遣し、同時に衛生団をつけた。衛生団の中にジョン・サザーランド博士が入っていた。この衛生団はスクタリに到着するや、病院や敷地内に放置された動物の死骸を埋め、建物の外側の庭を舗装し、清浄な飲料水を確保し、下水を浄化すると共に、水はけをよくし、建物の下を走る下水溝を清浄にして水がよく流れるようにした。壁に害虫駆除薬を塗り、建物に換気口をつけ、2重に並べてあったベッドを1列にして過密を避けた。また看護兵にゴミ箱と尿瓶を毎日、空にさせた。病院を汚さないようにとの注意書きも貼り付けた。それだけして、彼らは前線に赴いた。病棟の掃除は楽になり、清潔を保ちやすくなった。ナイチンゲールはこの活動を高く評価し、サザーランドの存在を意識し始めた。

この頃から死亡率は低下し始め、また前線からの患者収容も少なくなった。余裕が出来たナイチンゲールは、必需品のほか、紙やペン、百科辞典、地図や博物学、三角法などの本を送らせ、回復患者に読書をすすめ、家族に手紙を書かせた。飲酒を控えさえ、家族への送金を奨励し、除隊後の職業教育をするよう進めていた。無知と思った兵士はかなりの能力があり、勉強するものが多く、飲酒量は減り、家族への送金額は非常に増加した。ナイチンゲールは、「この英国兵士は昔のならず者ではない。高い潜在能力があるので、もっと大切にせねばならぬ」とも書き送っている。英国では1830年から教育の強化が始まっており、徐々に普及していた。義務教育になるのは1870年であるが、兵士の質は以前に比べ相当向上していたのである。ちなみに、物資調達視察グループは、クリミヤの病院や前線を視察し、戦場での調度品や必要物質の輸送、陸揚げ、管理状況、利用の指揮、負傷者の対策などの実態を報告書として政府に送っていた。こうした報告が後の英国の世界戦略に大きな役に立ったのである。

ナイチンゲールの努力や貢献にもかかわらず、スクタリでは看護方式や病院管理を含めた行動は、大部分の管理者には不評であった。あとから加わった別の看護団もナイチンゲールの指揮に反対するものが少なくなかった。大所高所に立ち、より広く深く考えての活動を理解できるものは多くはなかったからである。ナイチンゲールにあてがわれたスクタリの宿舎は、寒く粗末で、看護、物品の購入、管理の外、外部から訪れる多くの面会者、各種の相談に多忙を極め、途中で1度病臥、休養している。

アルマの戦いに敗れたと聞いたニコライ皇帝は1855年3月病死し、新帝アレクサンドル二世が就任したが、戦争を続けた。しかしフランス軍は約10万、イギリス軍は5万の兵士を動員して、9月 要塞に侵入、9月8日、セパストポリを占領した。

同盟軍は1万、ロシア軍は1万2千の兵が死亡した。そして1856年3月31日に戦闘は終わった。

戦争終了後、ナイチンゲールは、すべての看護団を帰国させ、最後の患者を見送った後、7月16日にスクタリをたち、マルセイユで下船、匿名でフランスを旅行し、情報を集めながら、8月6日密かにロンドンに帰った。この世の地獄を見た彼女は、大歓迎を受ける気は全くなかった。また人に利用されたくもなかったからといわれる。

なお、この戦争に就いてテニスンは「軽騎兵の突撃」という詩を書き、戦争に従軍したトルストイは出世作「セパストポリ戦記」を書いている。この敗戦以降、ロシアで農奴解放運動が続き、1861年には農民は土地を買うことが出来るようになったという。

帰国後の活動と病臥

帰国後、まずロンドンのある修道院を尋ね、そこでクリミヤで使用した公金の決算を手伝ってもらった。3ヶ月かかった。その後帰宅し、この2年間を回顧し、とくに、スクタリの高率な死亡の原因、責任の所在を明らかにするための報告書の準備を始めた。このままではまた同じ犠牲者が出ることを案じたからである。報告書は友人の戦時大臣ハーバートに送られたが、内容は、作戦に当たる軍関係者の管理や計画に就いての無能と怠慢、その原因、調度品の準備、補給のあり方、前線兵舎や野戦病院の選択、補修の仕方、食料の確保と輸送、管理、炊事場の設計、調理者の訓練、必要日常品の準備と、不足時の対策、前線での食料、必需品の保存・管理、医薬品・看護用品の選択、病院の全体的な管理法など、詳細な報告と対策書である。軍隊の給食教育などや陸軍医学校の設立まで提案してあったと言う。しかしこれらの報告書は公開されなかった。

一方議会では、視察調査団によるクリミヤ前線の調査結果を基に、軍指導層の無能や怠慢によるクリミヤ戦争の大きな犠牲についての責任が、諮問委員会で論議され始めた。しかし戦争に関しては多要因が関与しており、責任問題は軍関係者の反論も多く、民間の調査団を前線に派遣すること自体がおかしいとの指摘も出て、繰り返しの審議の末、結論はうやむやになってしまったようである。

ナイチンゲールはあきらめなかった。改善策をせねば新しい犠牲者を防げないと深く信じていたからである。基礎的データをさらに用意するため、クリミヤでその力量を認めたサザーランドや統計に詳しいウイリアム・ファー博士としばしば会って、説得力のあるデータの入手やその解析を依頼していた。

サザーランドは医師であり、その師、エドウィン・チャドウィック（法律家）は産業革命で環境が大きく汚染されたロンドンでは、医学よりも衛生と法律が優先するとして、テムズ河や市街の清浄化を主張した。しかし清浄化で利益を失う業者、政治家から嫌われ、尊大として疎まれ、医師達も彼の学説には賛成しないものも多く、彼は政府の衛生委員会委員長を解任されてしまった。ペンテンコフェルがミュンヘンで主張し、実施し、ミュンヘンを清潔な町に変えたのに比べ誠にお粗末であった。チャドウィックの思想を受け継いだのがサザーランドである。彼はクリミヤ行きからはずされていたが、最後の段階で参加でき、スクタリ病院でのそつのないスマートな活躍ぶりはナイチンゲールも注目していた。サザーランドはナイチンゲールから認められて、帰国後、英国を代表する衛生学者として多面的な活躍することになる。

ファーは1837年、ロンドンにできた戸籍本署統計部長であった。彼は貧しかったが、賢さを見込まれスポンサーを得て、薬剤師見習いとなり、さらにパリの医学校で、医学ではなく、自らの経歴を考え衛生学をえらんで卒業した。彼は医学統計とその活用が得意であった。優れた才能と洞察で日常事象と疾病の関連を統計学的に明らかにし、チャドウィックも彼の才能を買って、戸籍本署の職員に推薦したのであった。ファーは数学に強く、また医学統計から適切な結論を引き出す能力にすぐれ、公平で、謙虚で尊敬を集めていた。有名なロンドンのコレラ流行も、彼が提出したコレラ患者の地理的分布から、ジョン・スノー博士が、これは飲料水と関係があるとして、後に流行地区の井戸水使用禁止をして流行を防止したのである。ファーはすでに、不潔な環境と密集した集団で蔓延する病には原因は不明だが、「発酵病」とでもいう流行があるといっていた。これは接触伝染に似たものであるが、汚染環境から病因が由来するとの考えで、新しいものであった。細菌学研究は欧州でも始まったばかりで医師の関心は乏しかったが、ファーはすでに、フランス軍の罹病率と死亡率が治療法の相違ではなく、衛生環境と密接することを学んでいた。こうした考えは、チャドウィックらがテムズ河やロンドン市街を清潔にして疾病流行を防止しようとした基礎にもなっていた。

さて、ナイチンゲールの要請に応じてスクタリの統計を検討していたが、幸いなことに英国陸軍はクリミヤ戦争での全負傷者、死亡者の統計をとっていた。そして戦後しばらくたって公表したので、ファーがそれらを手に入れ、集計、分析することが出来た。その結果は、2万5千人のうち1万8千人を死なせた原因のうち、戦死はそれほど多くはなく、食料の補給、その管理の拙劣さ、調理法の貧しさ、兵士では不備な宿舎、過労、ケア、医療、看護など、衛生、医療態勢の貧しさと大きな関連があるこ

とが分かった。患者を過密に収容した場所はとくに犠牲者が多かった。1854年から55年の冬スクタリで5000人も死亡したのは、胸が悪くなるような不潔な収容施設と関係があり、他の野戦病院と比較し飛びぬけて高かった。彼ははじめから野戦病院そのものが疾病集団発生の際になると予想していた。彼の報告書では、ナイチンゲールが到着してから調査団が来る5ヶ月間、死亡率が最も悪かったことを明示した。死の収容所であった。その関連要因としては、医療品の不足、医療技術レベルなどとの関連は薄く、病院施設・その環境と強い関連があった。壊れた排水溝の上にたてられ病院、悪い換気、糞尿で汚染された部屋や床、ベッドがなく、床直接におかれた汚染藁床、下痢患者が多いのに糞便で汚染された病室や床、病棟は清掃されず、しかもすし詰め収容などが高い死亡率に関連があった。栄養不良も基礎にあった。そして壊血病死も少なくなかった。戦場から病院までの長い輸送中の死亡率は高くなく、またスクタリの港から病院までの悪路の坂道のもあまり死んではいなかった。12月以降、軽症患者でも悪化し、間もなく死亡する例が多く、前日元気であった兵士が夜半に死亡しており、病院に滞在すること自体が死の危険を意味していた。

そして、その高かった死亡率は、サザーランドらの衛生団がきて、環境を清浄化した後に急に低下しており、その低下はその他の要因とは全く関係はなかった。つまり、この高い死亡率の原因は汚染された病院環境に暴露されたことが原因との結論であった。彼女はファーの助力を借りて、スクタリの時系列死亡頻度分布を、円形図表にし、死亡率がどのように増加し、減少したかを分かりやすく示した。これは女王でも理解できるよう作図した彼女のオリジナルである。この図でも衛生団の清掃後に急に死亡率が低下したことをより明確に示していた。もっともこうした報告書は結局公開されなかった。そしてこの未公開が、後に米国で起こった南北戦争で、救われるべき多くの軍人の犠牲を救えなかった原因となっていた。これに就いてはファーの息子が南北戦争に従軍し、ひどい衛生状態を嘆いた手紙を父親に送っている。

ナイチンゲールの報告書については、ハーバート大臣は高く評価したが、医療面だけを取り上げて論ずるには時期尚早としていた。しかし、各方面に軍の衛生対策強化の緊急性は訴えていた。軍医学校も彼の努力で後に設立されることになる。しかし彼は過労のため、まもなく病で死亡する。政府内に最も親密な後見者がいなくなったことはナイチンゲールには大きな痛手であった。

ナイチンゲール倒れる

さて、ファーの分析結果は、彼女には思いもかけぬことだった。この時代まだ細菌

学は始まったばかりで、細菌などの接触感染でこれほどの犠牲が出ることは、偉大なウイルヒョウやペッテンコフェルすら信じていなかった。まして医師でないナイチンゲールが予想できるわけではなかった。したがってあの昼夜を分かつた最初の4ヶ月の異常な努力の効果が全く死亡統計上に現れなかったということは予想外で、すぐには到底受け入れることが出来なかった。彼女はこの統計結果を再検討し、いろいろ考えたが、統計学を学んだ彼女にはこの苦い現実を否定することは出来なかった。結果として痛烈な衝撃が彼女を見舞った。幼少時からいろいろな領域の学問を学び、知識を集め、視野を広め、人を助けようとの高い志を抱いて、進んで困難なスクタリの野戦病院で精一杯努力した。そして内・外から嵐の様な賞賛を受け取った。両親からも感謝とねぎらいの手紙をうけ、彼女はスクタリから「かって、私の名と、神と人類のために、自分でできるだけのことをやり遂げたのが、あなた方をよろこばせたのであれば、それこそ私にとって本当に喜びです。…」と書き送っていた。死亡率減少が別の原因であったことは、彼女の責任ではなかった。しかし彼女は狼狽し、両親や家族、友人はじめ多くの人々に合わせる顔がないと落ち込んでしまった。その上、それまでにクリミア戦役の犠牲の原因と対策について報告したなかで、自らがあやまって判断した部分を削除し始めた。また友人に送った多くの手紙なかで、彼女の意見を述べた手紙はすべて焼却するように頼んでいる。特にファーにはすべての手紙の焼却を依頼した。誤った判断の記録を残したくなかったのである。つまり隠ぺい工作をしようとしたのである。これは自分自身に対する裏切りであった。彼女は激しい自己嫌悪で錯乱状態になり、おかしい手紙を送ったこともあった。1857年8月20日、虚脱状態になり、病臥してしまった。以降、家族にも友人にも誰にも会おうとせず、やがてロンドンをのがれ、温泉町 モルヴァンに移り静養した。

彼女を打ちのめした罪悪感は、余人には感じにくいものである。それは不測の事態を予見できず、犠牲者を救えなかったというものである。それを恥じとし、罪とし、万死に値すると考えたことである。クリミアの最高軍司令官ラグラン卿は戦いに勝ったものの多くの死亡者を出し、作戦が万全でなかったことから誇りを失い、「もう私は生きてイギリスの地を踏めないだろう」と洩らしていたが、やがてクリミアで病死した。コレラが主因といわれていたが、ナイチンゲールは、ラグラン卿は失敗と言う精神的衝撃で死亡したといっている。こう言いきったのは彼女の卓見と筆者は考えているが、それだけに彼女はラグラン卿と同じ様な立場に立ったと感じたのであろう。そして、この誇り高い聖女の心も身も崩れ落ちたのであった。

誰にも会わず、病臥しつづけ、すべての医療、看護活動を放棄した。接触も絶た

れた家族や友人は困惑して遠くから見守るより仕方がなかった。やがて痺れを切らした父が不意に療養先を訪問して彼女と親しく話し合うことが出来、それがきっかけで少しずつ快方に向かったと言う。

病臥しながらの英国の環境衛生、看護改善に就いての活動

ラグラン卿は67歳であったが、ナイチンゲールはこの時37歳であった。強烈な挫折感もこの若い肉体を終らせることは出来なかった。病床で悶々としながら、生きながらえて何をするかと考える日々だったのであろう。彼女は殆どのことに対応できる自信があったのに、病院自体が汚染の場で、多数の人命を奪うことは、全く想像もしていなかった。人の能力を超える自然のすざましさに呆然としたであろう。自分が習得した看護とは何か、病院とは何かを自問自答せねばならなかったであろう。苦しみ苦しんだ挙句、「あなたの間違いは神の計画の一部なのです」と言う考えを信じて生きるようになったと言われる。

療養しながら彼女は、こうした不測の集団的な死亡が病院内で起こるなら、これまでよりどころにしていた病院は危険な場所であり、特に、密集した収容場所しか与えられない貧民には特に危険度が高い。つまり、死亡を助長する慈善病院の存在は否定せざるを得ないと考え、病院看護も意味はないとするようになった。結果として、病院建設とか、病院看護婦の養成も無意味であり、そうした問題から離れようとしたのである。なんという洞察と決断であろうか。

公衆衛生と病院衛生での活躍

彼女は自分の死は近いと感じていた。しかし少しずつ体調が回復するにつれて、まだせねばならないことが多いのに気づいた。

翌年、テムズ河が浄化機能を失い、大悪臭を出す事件がおきた。また、猩紅熱などの伝染病は、環境を衛生的にしても避けられない常在伝染病であるというジョン・サイモン（衛生委員会責任者）らの主張がまかり出ると、そういう理由で環境対策を先延ばしする考えに反対して、論戦せねばならないと決意した。チャドウィックに代わり衛生委員会委員長になったジョン・サイモン博士は病の原因を見つけるのが先で、対応は後でよいとした。まず科学的研究を推進して原因を見つけることである、つまりビッグ・サイエンスが優先すると唱え、ロンドンの衛生対策は後回しでよいとの考えを主張した。これは間違いであると信じたナイチンゲールは、反対側のサザーランドらを応援するため、諸研究を展望し解説しながら、こうした現実におこる悲劇を

早く防止するのは生活環境条件の改善であり、環境衛生対策が最優先するとの論陣を張った。病床から指示を出し、必要なデータを集め、医師や統計学者に分析させ、吟味して、文書を整え反論したのである。

後に医学と公衆衛生の両者の進歩でこれらの病は激減することになるが、当時、英国の有力者は、衛生対策では費用に比べ利益が上がらないので、反対したのである。サイモンはこれを利用して勢力を強化していたが、後にサイモンは自分の学説が不利になると、こっそり一部を削除、改訂して、論争をすり抜けていた。

1858年、セント・トーマス病院が移転せねばならず、ナイチンゲールは病院建設の専門家として意見を求められた。彼女はロンドン市内の衛生状態から見て、新しい慈善病院は広大な自然に囲まれた郊外のほうが健康的として、約42,000平方メートルのルイシャムの用地を推薦した。これには病院の常駐医師も賛成していた。ロンドン市内にはすでに多くの病院があったからでもある。しかし、同病院の外科医長であり、衛生委員会の責任者であったサイモンはロンドン市内での建設を望み、理由として緊急事態に対応しやすいと高官たちに説明、同意を得ようとしていた。彼は自分の勤める慈善病院からの収入が少ないので、ロンドンに住む裕福な患者を診療しやすい、また研究もしやすい市内での建設を望んだのであった。そして、テムズ河の国会議事堂の対岸に建設地をうるのに成功した。ナイチンゲールは失望した。この河畔の衛生環境は衛生的でなかったからである。しかし、多くの人から依頼され、この病院の病棟の設計は引き受けた。換気を重視し、看護や管理が容易な、いくつもの「独立病棟」を設計し、建設させた。院内感染を考慮してのことである。前述したように、天井の高い広々とした病棟で、窓際に過密を避けてベッドが並べられ、ベッド間に仕切りはなく、換気はよく、清潔を保ちやすく、医療・看護は能率的にできた。また患者は医師や看護師の所在を常に確認できるよう設計されている。独立病棟にしたので、第二次大戦ドイツの爆撃でも被害は少なかったという。

ナイチンゲールは以前からナイチンゲール基金による看護婦養成施設を求められていたが、スクタリの経験から病院看護が貧しい人々を救う最善の道とは信じなくなっていた。それで、看護婦養成にはあまり乗り気でなかった。その後、ナイチンゲール基金を集めた中心人物、前戦時大臣ハーバートらが、病院の看護業務の水準を上げるにはこうした施設がどうしても必要として繰り返し要請していたことを思い出し、彼女はセント・トーマス病院に看護婦養成所を設置することにしたが、前述の理由もあり、直接の指導はしなかったという。

こうして病臥しながら、重要な仕事をつづけ、数年の生存予定が40年をこし、さ

まざまな社会貢献をしたわけである。このうち、若干の事項に就いてふれる。

看護覚え書

ナイチンゲールは政府へのスクタリの報告書の取り扱いや、前記の病院建設をめぐるの医師との対立から、もう政府高官や医師と、衛生や看護の論議をしても無駄と感ずるようになった。そして直接一般住民に訴えてはと考えたようである。

1859年、彼女は有名な「看護覚え書き」を発行した。この書のまえがきには「この書は看護婦の学習のためではなく、他者の健康に就いて責任を持つ一般の女性に、考えるヒントを与えるだけのもの」とある。看護婦にとは書いていない。はじめに「本当の看護とそうでない看護」に就いて論じ、看護は患者の回復作用を助けることであり、それには患者の観察や周辺環境への配慮、食事など日常の生活への適切な対応が必要であり、これらは健康人の看護に就いても当てはまると記述している。この書の内容は

1. 換気と適切な温度：保温、清浄な空気、排泄物の処理、におい消し、
2. 家屋の健康： 清潔な空気と水、よく排水が出来る、部屋と周辺の清潔、採光、
3. ちょっとした管理： 病人、面会人への対応、部屋の整備、事故の防止、経費や書類の管理、責任をもつこと、
4. 物音： 不必要な物音、説明のしかた、言葉使い、ドアやまどの雑音、不用意な発言への注意、がんばりすぎない、明確さ、軽率な見舞いへの戒め、音楽の効果など、
5. 変化のあること： 看護環境は変化が必要で、部屋の整備や、花、絵、写真をかざる、変化のある食事、体位変換、手先を動かさせるなど。
6. 食事： 病人に適した食事 {質と量}、摂取量、摂取内容、食器などの配慮、
7. どんな食べものを： 病人食の内容、その栄養価、しかし栄養素だけではなく患者が何を食べるか、食べたいか、紅茶、コーヒーなどの1日量、
8. ベッドと寝具： 寝具の種類、ベッドの幅、長さ、清潔さ、快適さ、明るさ、それに褥創の注意、
9. 光： 部屋の向き、眺望と日光、
10. 部屋と壁の清潔： 部屋と床、カーペットとその清潔さ、掃除の仕方、壁の塗料、壁紙、煙や臭いを除く、

11. 身体の清潔： 清拭、石鹸で洗う、体を蒸してこするなど。換気と同様に必要。
12. 希望や助言を気楽に言う： 医師や看護人、面会人は希望や助言を気楽に言ってはいけない、助言人はしばしば人を傷つける。高慢、あつかましき、まがいごとがあるからである。病人はそんなに話したがる。
13. 病人の観察： 確かなすばやい観察が必要、それには訓練が必要、観察は生命を救い、健康と安楽を増進する、

結論： 衛生看護は予防上必要である。これは看護の熟練技術を軽視するものではない。女性には衛生看護など不要といわれるが、本当の知識が得られれば素人療法もやめさせることが出来る。そういう本当の看護というものを本書で示した。決して専門的な看護技術、つまり熟練技術を教えようとしたのではない。

この書は現代でも通用するものであり、世界中の看護に関心のある人々のバイブル的なものとなっている。スモールはその著書の中で、この書は反医師、反病院、反病院看護の書としてかかれたとの批判も紹介している。ナイチンゲールは当時の考えから、職業としてあまり人助けにならない病院看護の存続を疑問視していた。これは前述したように、スクタリの経験や、ロンドンの多くの病院の実情から、大部分の慈善病院は不潔であり、患者は密集して収容されざるを得ず、入院すれば原病以外の原因で多くの患者が死亡する。そして、医師も看護婦も型どおりの医療・看護で、環境改善は考えず、また貧困患者の予後や死亡原因にはあまり関心がない。したがって、貧民患者こそ、こうした病院看護は害が多く、不要ではないかと考えつめたのである。それに代わるものは、日ごろ直接病者を看とっている家族、特に主婦あるいは召使であり、彼女らの、心に届く看護心得、手引きをつくったほうが有用として、書をまとめたのである。ちなみに、19世に入り病院が増え、院内感染はしばしば起こっていた。すでにゼンメルワイスは病院での産褥熱の惨禍を繰り返し報告したが、無視され、絶望に追い込まれていた。

病院、特に慈善病院は、貧しい人々を密に詰め込み、多忙もあり、心のこもった医療・看護はなされてなかった。それに比べ貧しい家庭でも、愛情と気配りがあれば、療養には最適の場とナイチンゲールは考えた。そういえば、現在の近代的な衛生的な病院でも官僚的な運営が多く、院内感染もまれでないのも、誠に卓見といわねばならない。どんなに科学的、効率的と言っても人の健康を完全に守るのは難しいので、彼女は危険が大きいことはしないほうが良いとの意見をだしたのである。細菌学の未発達な時代に、現実をみつめて予防法を洞察した彼女の鋭さには驚くばかりである。

看護覚え書に就いては多方面から賛辞を得たが、その影で、これは「慈善団体の弊害を、大変な意地悪さで、微にいり、細にわたって懲らしめようとしている」との批判があったトスマールは書いている。それは「病院看護は人の自然治癒力を妨害するための訓練も受けているので、子どもの死亡率を高めている。病院に頼るのはおろかである」と書かれているのに、一部から強い反感を持たれたのである。なお、この書が発行された年から、ロンドンでの猩紅熱の死亡率が減少している。偶然かもしれないが、賢い母親や看護人はより優れた看護と共に予防にも心がけるようになったかもしれない。彼女は「看護覚え書」への批判を受けて、翌1860年この書を大幅に書き換えており、世界中に普及しているのはこの改訂版であることを付け加えたい。

なお、1867年には救貧院病院における看護、1876年には貧しい病人のための看護、1882年には看護婦の訓練と病人の看護、病人の看護と健康を守る看護、など次々に看護に就いての論文を出しているので、看護の重要性を否定していたわけではない。1863年の病院覚え書もすばらしい著書である。

病臥中、彼女が力を入れた問題に 英国陸軍の衛生改善がある。依頼を受けて、改めて疫学的調査を依頼し、集計、分析して、インド在住の英国陸軍の衛生対策を送付している。これは時期を変え何回か報告書を作成している。今見てもすばらしい出来であり、同時に、英軍が駐屯するインドの自然環境や社会環境を考慮した対策が書かれ、さらにインド民衆の看護と衛生に関してもきめ細かな現実に即した報告書があり、これらは現在の途上国にそのまま利用できる部分が多い文献である。

ナチンゲールの提案と英国陸軍の衛生改革、特に食事について

伝記作者らは彼女のイギリス陸軍の衛生改善案は殆ど公式に採用されていないと嘆いているが、実際はそうではなさそうである。最近、日本医史学会誌に掲載された秋山ゆり子氏の「近代イギリス陸軍の衛生改革」には、ナイチンゲールのスクタリの報告書から陸軍の衛生や軍人の食事が非常に重要であったことが示されている。クリミア戦役5年後の、1861年には陸軍医学校が開校しており、ここでは外科、内科、病理学のほか衛生学の専門教育も含まれている。教官のパークス博士は「実践衛生マニュアル」を出版、住居、上下水道の衛生管理、栄養学の重要性を説いている。このエドムンド・アレクサンダー・パークス博士もナイチンゲールと意見を同じくした仲間である。彼の教科書は、明治時代、海軍の高木兼寛の脚気対策の参考書になっている。1883年には陸軍病院の調査委員会で看護技術、健康・衛生管理が論議され、医官は治療ばかりでなく、食事や清掃も監督することや、看護兵が訓練されて直接作業

に当たる体制がつくられ、食事調理訓練もおこなわれるようになった。1855年には陸軍宿舎用の調理設備が考案され、陸軍でのコックの養成もはじまり、陸軍調理学校も誕生した。これはインドなどアジア各国、アフリカをはじめ7つの海に展開するイギリス軍兵士の健康を考えたからと言われる。1890年代には兵士のヘルス・ケアの指導も行っている。かくて大英帝国の戦力は名実ともに強大になったのであろう。これらはナイチンゲールのスクリタの報告書から始まったものと言ってよく、それを充分生かしたたわけである。

こうした英国陸軍の衛生対策は日本陸軍にも影響があり、日露戦争時には、外国での野営地と行軍中の衛生管理をまとめた「陣中衛生心得」という冊子が最初 8750 冊つくられ、その後病気の予防を目的とした冊子 9550 部も発行、配布され、兵士も衛生講話を受けたとある。これは恐らく軍医総監森林太郎も関与していると考えられるので、彼としては日露戦争には必要な医療衛生対策はすべて実施していたと思われる。ただ「脚気」は欧州にはなく、その上、頼みに思う母校東京大学研究者らの脚気の病因は、食事ではなく、感染論が中心であったことである。彼は万全を尽くしたが、脚気の問題では、晩年、諸先輩の責任をすべて背負って、茨の道をたどったわけである。彼がもう少し後で欧州留学をしていたならば新しい学問を取得し、陸軍にさらに大きな貢献をしたと考えられる。歴史に「もし」はないが、ほんのわずかな期間が、彼に不運をもたらしたことを嘆くばかりである。

ナイチンゲールの思索

ナイチンゲール全集には「思索への示唆」という論説があり、彼女の信仰と生きる上の考え方が述べられている。1873年彼女は「1999年には我々の宗教はどうなるだろうか」という随想のなかで「知識がないために失態を起こしていることについて、未だ世論の形成はないが、いずれ形成されるべきである。善意があれば充分だと思われる。しかし失態はそれも組織的な失態は犯罪よりも害を及ぼす。・・・」と述べており、1999年までには組織的な失態を避けることが解決できることを希望したようである。彼女は自分の学んだ苦い教訓を歴史にとどめたいと思ったのであろうかと、スモールは結んでいる。しかしこれは現在でも重要なテーマであることに間違いはない。また彼女は、「神はすべてを知り、試されたと」といっているのも心に響く。この章の最後は、カサンドラ（死にゆく女性）に「自由よ 自由よ。おお神々しい自由よ。ついにやって来たのですね。いらしてください。美しい死よ」と言わしめ、そして“哀悼も 賞賛も墓碑には刻まないように”とある。彼女の生涯を思いやると感

無量である。

(付記) これだけ名声を博し、大きな業績を成し遂げた偉大な女性が、チャレンジし、努力し、苦しみ、長い生涯、たゆむことなく戦ったとは想像もしていなかった。筆者的に言えば、彼女は困窮の人々を救うという青い鳥を追って努力し、成功したと信じていたが、結果的には失敗と感じ、挫折し、その罪(恥)を取り戻そうと、打ちのめされた心を奮い起こし、長い後半生を考え続けて生き抜いた。この人生も偉大といわざるを得ない。ノブレス・オブリッジとはこうしたことも言うのであろう。

ノブレス オブリッジ (高貴な人の義務、徳義)

参考文献

- ・湯浅ます監修、薄井坦子、小玉香津子、田村真、小南吉彦編訳：ナイチンゲール著作集第1-3巻 現代社 1974-77
- ・セシル・ウーダム・スミス著 武山満知子、小南吉彦訳 フロレンス・ナイチンゲールの生涯 上巻、下巻 現代社 1981
- ・ヒューズ・モール著 田中京子訳 ナイチンゲール 神話と真実 みすず書房 2003
- ・井上 幸治編 ブルジョアの世紀 世界の歴史 12、中央公論社 1961
- ・黒川 祐次著 物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国 中公新書 2002
- ・薄井 坦子、小玉香津子、田村真、山本利江、和住淑子、小南吉彦訳 看護小論文集 現代社 2003
- ・小玉香津子、尾田葉子 訳 看護覚え書き 本当の看護とそうでない看護 日本看護協会出版会 2004
- ・石原明 監修 看護二十年史 メヂカルフレンド 1967
- ・秋山ゆう子：近代イギリス陸軍の衛生改革—実践的ヘルス・ケア知識の導入—日本医史学誌 54：19-29 2008

(名古屋大学名誉教授、愛知県がんセンター名誉総長)